

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12077

研究課題名(和文)ハンセン病療養所看護師のライフストーリー研究—ケアの本質：成長と信頼に着目して

研究課題名(英文)Care in Hansen's Disease Sanatorium:From the Life Story Interview of a Nurse

研究代表者

八塚 美樹 (Yatsuduka, Miki)

富山大学・学術研究部医学系・教授

研究者番号：00293291

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：看護師の人間関係や相互作用の観点から、成長と自己実現を助ける看護につながるケアの本質を明確にすることを目的に、ハンセン病療養所に長年勤務した経験のある看護師とその看護師と繋がりのある同僚看護師にインタビューをした。結果、ケアを提供する者と提供される者との相互作用を高めるために、ハンセン病を取り巻く社会的環境を念頭に置きながらも看護師-療養者関係を超越して、苦悩するひとりの人間として向き合っていた。敬意と愛ある関心、無知の姿勢で対峙し、常に苦悩する人から学んでいた。ケアは、施設の生活を中心に行われていたが、施設以外の生活にも及んでいた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護師の人間関係や相互作用の観点から、成長と自己実現を助ける看護につながるケアの本質を明らかにすることである。ハンセン病療養所に長年勤務した経験のある看護師とその同僚看護師にライフストーリーインタビューをおこなった。結果、相互作用の質を高めるために、ハンセン病を取り巻く医療や社会的環境を念頭に置きながらも、療養する者の語る物語りに関心を寄せ、ともに歩み、自らも学ぶ姿勢が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the essence of care that leads to nursing that supports growth and self-actualization, from the perspective of nurses' relationships and interactions. We interviewed a nurse who has worked for many years at the Hansen's Disease Sanatorium and a colleague nurse who is connected to the nurse.

In order to enhance the interaction between those who provide care and those who are provided, while considering the medical care and social environment surrounding Hansen's disease, he faced himself as a distressed human being, beyond the relationship between nurses and caregivers. A nurse built relationships with respect, loving interest, and ignorance, and always had the attitude of learning from those who suffer. Care was centered on living in a sanatorium. Also, he was involved in life outside of the facility. The obtained results can be utilized in future fields of basic nursing education and continuing education.

研究分野：看護学

キーワード：ケアの本質 相互作用 ハンセン病

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

医療や看護、介護、福祉の領域を超えて、「ケア」という用語は現在、多義的多元的な意味を持ち、ケアする者とケアされる者との相互関係から、信頼が生まれ両者の人間的成長につながる。平均寿命が80歳を超えた現在、成長と自己実現を助ける看護において、人間関係や相互関係の観点から、ケアの本質を探究することが求められている。

### 2. 研究の目的

昭和30年代から40年にわたりハンセン病療養所において勤務し、里帰りに付き添うなど入居者とのつながりを現在も維持している看護師に焦点を当て、看護師と看護を取り巻く人々にライフストーリーインタビューを行うことにより、ケアとは何か、その本質を明らかにする。本研究において、以下の3点を小目的とする。

看護学におけるケアの本質についての書籍・文献成長と自己実現を助ける看護につながるケアの本質について明らかにする。

ハンセン病療養所に長年勤務した看護師1名にライフストーリーインタビューを実施し、成長と自己実現を助ける看護につながるケアの本質について明らかにする。

ハンセン病療養所に長年勤務した看護師1名とつながりのある同僚看護師、入所者にインタビューを実施し、成長と自己実現を助ける看護につながるケアの本質について明らかにする。

### 3. 研究の方法

「相互性」を意識したメイヤロフ (Mayeroff 1971; 1987)、「気づかう看護」を提唱するベナー (Benner 2000; 2005) 人を「尊重する」という概念を重視したワトソンのケアリング論 (Watson 1985; 1992) を中心に、成長と自己実現を助ける看護につながるケアの本質は何かを明らかにする。

これまでの親密性を基盤に、ハンセン病療養所に長年勤務した看護師に研究の説明と同意をとり、ハンセン病療養所での看護師を志した理由や、療養所での生活、入所者との関わり、さらに医療者や他の職員との関係性、法律、制度の変化と園の変遷、看護師として大事にしてきたことはなにか、つねに心がけてきたこと、特にハンセン病療養所の看護師であるために意識してきたことはなにか、元患者たちとの出会いやエピソード、いまだから言っておきたいこと、ずっと考えてきたこと、社会に伝えたいこと、ポジティブ思考をもつ療養所入所者のレジリエンス要因、これまでの人生を振り返って感じることをライフストーリーインタビューというかたちで聞き取る。

でおこなったインタビューに基づいて、繋がりのある同僚看護師にインタビューし、看護師を取り巻く人間関係や相互作用を取り上げ、「ハンセン病療養所」という限定された社会のなかでいかに成長と信頼関係が構築されていったか、その根底にあるケアの本質とは何かとインタビューデータとともに分析、考察を行う。

でおこなったインタビューに基づいて、繋がりのある入所者に同意をとり、看護師を取り巻く人間関係や相互作用を取り上げ、「ハンセン病療養所」という限定された社会のなかでいかに成長と信頼関係が構築されていったか、その根底にあるケアの本質とは何かとインタビューデータとともに分析、考察を行う。

### 4. 研究成果

哲学者であるメイヤロフ (Mayeroff 1971; 1987) は、「ケアの本質」のなかで、一人の人をケアすることは、最も深い意味でその人が成長すること、自己実現することであると述べ、その人の世界を、まるで自分がその人になったように理解し、その人の目で見えてとることが必要であると述べている。教育学領域のノディングス (Nel Noddings) もケアリング論について述べており、メイヤロフと同じく、「ケアする人」と「ケアされる人」との「関係性」に重点が置かれていた。ケアの関係性には、「場の中にいる」ことが大切であると繰り返し述べている。それは、ケアすること、ケアされることを通じて人は自分の存在全体の一部であると感じ、私と補充関係にある対象へケアによって中心化され、全人格的に統合された生を生きることがケアの本質であると考えられる。「気づかう看護」を提唱するベナー (Benner 2000; 2005) は、看護において、ケアは人に対して気づかうこと・関心をもつことから始まり、このケアという様式を用いて人々と相互作用をもつことで、ケアが発生し、その関係性が双方にとって援助の受け渡しになると述べている。ケアを通して人と人との間に一つの世界ができ、動機づけと方向づけができ、その人にとっての大切なものやことを気づかうことによって、行為が生まれ、そでは感情や情動など目に見えない感覚的なものだけではないとし、看護の基礎であると定義した。ケアリング論 (Watson 1985; 1992) で著名なワトソンは、メイヤロフのケアについての考えに拠りながら、看護において患者の健康を目指すケアにおいては、相互的な関係性が基礎であると述べている。そして、患者と看護師のケアにおける関係性は、個人の生きられる世界と間主観的にかかわることに関係し、道徳的な次元での理念であり、人間である患者が、自分に関する知識を得て、コントロールできるようになり、外部の環境がどのようなものであろうとも内的な調和を保てるよう手伝うことで深まるとしていた。さらに、このプロセスは、人間の主体性が保持され、相手の幸せに向かってプラスの変化が生み出されるようになる一方で、

看護師の成長も達成できるとしていた。

成長と自己実現を助けるケアの本質は、ケアする者とケアされる者の間に存在すること、患者の目的を達成する過程で生まれ、患者も看護師も成長することが共通する内容であった。

ハンセン病療養所に長年勤務した看護師 1 名にライフストーリーインタビューと、その語りから繋がりのある同僚看護師 2 名から得られた内容から、成長と自己実現を助ける看護につながるケアの本質について考察した。

ハンセン病を患ったというだけで、家族から切り離され、故郷を追われ、日常生活を失った人々、療養所につくと、消毒のためクレゾール入浴をし、病衣に着替え、隔離と治療が続けられた。“包帯一つ巻くときも、安易に巻くんじゃなくて、いい肢位が保てるようにして、ウオノメ、タコなど、感覚がないから変形した足で力点が違う。痛いことがわからないから、気を付ける”爪も深く切っても痛いと言えない。血が出たら、ばい菌が入り、腐骨になる。きれいな仕事をするの“どこかで、自分が感染するとは思っていなかった”と、対象の病状を深く理解しケアを提供していた。

“看護師長になっても、病院とは違う、生活の場だから、お金のトラブルで刃物事件がおきたりもして、警察とも仲良くしている”と生活全般に関わっていた。

“内緒のこともたくさんある、言うとなんか傷ついて。だから知らないふりもよくする”と、全体を見据えてケアをしていた。“一生けん命努力している日地には、拍手、応援して。そうでない人には、頑張らんがと言う”と個人に応じたケアを実践していた。

“胃がんの手術した人に、職員旅行にいったところで買ったリンゴを絞ってあげると、生き返ってとその言葉が自分のことのようにうれしい”と私生活をケアに生かしていた。

“同じところで働いているから、家族以上に知らないことはない”と同僚との関係性が密であった。“島が好きなのよ、海があって、自然がいい。島が私を認めてくれた”と島を愛し、島が自分の成長を助けてくれ、自己実現を助けてくれたと考えていた。

同僚の看護師は、同じ病棟で働いたことがなかったけれど、「らい学」というセミナーや学会と一緒に勉強したり、ボランティアで旅行にいたりするなかで、不自由な暮らしを支えるためのグッズを持参する姿から、ハンセン病療養所に長年勤務する看護師から大いなる刺激を受け、尊敬していた。これらの特徴的な語りから、ケアする人が、ケアされる人から学び、成長と自己実現を助けていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Michiko Kadobayashi
2. 発表標題 "I was Brought up in the Island" with Ex-patients of the Hansen's Disease Sanatorium :From the Life Story Interview of a Nurse
3. 学会等名 23rd EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Michiko Kadobayashi
2. 発表標題 Care in Hansen's Disease Sanatorium: Life Story Interview with a Nurse
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	門林 道子  (Kadobayashi Michiko)  (70424299)	日本女子大学・人間社会学部・研究員    (32670)	